

見てから読むか…

花田, 俊典
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/16302>

出版情報 : 文献探究. 3, pp.12-12, 1978-09-23. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

「六子雜記」

見てから読むか……

花田俊典

見てから読むか、読んでから見るか、その筋にはいささか着まぬが、見よか読むか、この方が健全であるに決っている。ところで、いづれや原作坂口安吾・脚本富岡多恵子・監督篠田正浩・主演若山富三郎(山賊)・若下志麻(都の女)の「桜の森の満開の下」を見た。桜吹雪の花ざかりの森での怪奇と幻想の物語」とはそのふれこみだが、既に読んでいたから、つまりは読んでから見た。細かいことは一切見て見ぬ、ことにする。

急げばクライマックスである。坂口安吾は書いていた。「男は満開の花の下へ歩きこみました。あたりはひっそりと、だんだん冷めたくなるようでした。彼はふと女の手が冷くなっているのに気がつきました。俄に不安になりました。とつさに彼は分りました。女が鬼であることと、突然どツという冷めたい風が花の下のかの涯から吹きよせていました。」見れば、山賊の若山富三郎は後ろをふりかえってみて、やつと背中の女が鬼であることに気づく間抜けさである。富岡多恵子は書いている。「ドツと吹きよせる桜の花びら。／ふりかえる山賊。／それは、紫色の顔、ちぢれた緑色の髪を

した老妻である」篠田正浩は言っている。「すべて原作通りですよ」「花の下では風がないのにゴウゴウ風が鳴っているような気が」する山賊である。「花びらがぼそぼそ散るように魂が散っていくのちがだんだん衰えて行くよう」な桜の森の満開の下の「不安」と同じ不安感を山賊に感じさせる女である。若山富三郎とて、ふりかえらずとも気づく位の才子とは見た。若下志麻とて、ふりかえらせずとも気づかせる位の魔性を備えた佳人とは思いたい。あとの仕上げは坂口安吾によかせよう。「感じられる世界の実在すること、そして、感じられる世界が私運にとってこれ程も強い現実であること、此処に奥感を持つことの出来ない人々は、芸術のスペシアリテの中へ大胆な足を踏み入れてけならぬ」(「EARTH」に記す) 私はそれから映画館を出てへ敬愛する詩人富岡多恵子の言葉をこっそり呟いてみたような記憶がつかにある。「わたしは近頃泣き虫になった」(「テーブルカアの旅行」) 見てから読むか？ 読んでから見るか？